玉燕小揮

八

東京大學圖書

源氏物語玉の小櫛八の巻

吉市植之

ぶふそう　二のひ　ぶふくハ玉づくりの長き矛を帖とするなり。おとうり
ゆのくりふし。えしかぐハそうのきさき人ちの嫡男のおのくえ
しかぐし。そそけえしかぐのアふそとハいづれも験もなくてといふ
こそなれ。えしかぐ人なべし。

人儀き人のるゑ名ゆそう　日　人々ゑ家長大ゐ。人ゆうゑ名玉菖
長き方ようん儀きし。名琴えるゆ。おゆくしたきさき人ちの中
ふるゆ。ゆ大ゐハ玉菖長のんづきゆく。儀くおづきて人ちふ。その人のと
名ふしもるゆぎんのるしことよといふし。住みるかるゆぞこの験

のす紙にところを以ていふも、ひがこと也。括きもあらし。

なづくまでなど　四のひら　などハ何ぞ也て。なぞくハなどしふまじ

きこゆらんなる詞也。一本かゝるもじ有るよろし。

殿もいそぎし　五のひら　とハその誤也。とかでハ上文よりのつゞきいかゞ。

もしとあらばいそぎしうおもわれを拘らう。などもみしが落るらう。

方おつとうちてえく　六のひら　括出あいがし。

まえやうふえ　同　んまさあのことといふよりハ、るりふまでてのるあへる

詞あるをこれよりハ、ゐりふ見ゆハ何との言也て、實りハといふ言也。

けんとあり語いぞ　八のひら　俗にいふかまひあいごと也。

さといふを語ふ　十五のひら　細流に決懸と有るよろし。いハ決ぐとうまで。

鑄る も本同じ。短冊子に、そへ立ちてて、白きかみを、いりけさせ

よるもいたなり。志わらく古のあらし。常花抛結根合也に、同の所にき

こゆるのかおらくせ語りてバこそ。あれあはどいさせ給ひてやよ

ろしかるむとやをバ、その古あるゝなれ志つらひして、いなるべくえたる。

るへぐるきぶえしさせあふ。などあり。俗にいふあぶなるし。こハ火取乃

灰を、うしろうちうちかく語ふ也。括き誤也。

方んまえく　十六のひら　香あみぶらくにんさへ也。香とよハ、香も抜也。ひと

つに火取をこえてあり。住よろし。

んそれ見き　同　玉かづらの、示浸やまち恨むらんと思ふをいふ也。

いとひろし　十七のひら　此詞のこと。上にいつるがあし。括き誤也。

かくとはんふうゝ　廿一のひゝ　冊子地ようつふ侘し。

三のみやまおふうゝ　三十はひゝ　原山市庭。大和ふかくゝるハるゝ。二

三の白ぞ大和ゝむぐゝゝなる。

むゝはるふぐゝと光ゝと　廿二のひゝ　芳地法ふかるゝ和べゝ。伊海ふ

引きゝるゝ文ゝるゝふを行ゝゝど。

和ゝハゝ法ゝふものを　月　大和ふんをゝ和ゝ。寿ふたゝまゝくゝん

の国ゝハふものをゝやうとハゝろゝゝ光ゝゝどゝふゝの侘し。

三　かぐゝりハゝゝ　廿三の初ゝ　初二白ハ寿はゝぐゝゝ和べゝきゝのゝゝ和ハゝる

ふゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ光ゝゝゝ。おゝゝゝはゝゝ法ゝゝし。三の白ハ女法文礼

ゝゝちはゝぐ法ゝいゝゝゝ文ゝを寿法ゝるゝゝ手ゝゝゝ。

ゝんゝゝ光ゝゝ法ゝふも　廿四のひゝ　ゝ世の二家。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。大

かゝゝゝゝゝ行ゝゝひゝ人のゝかゝふゝ文地ゝゝふゝ。おのゝゝゝの人のか

ゝほゝふゝゝゝひゝゝゝれわゝゝゝし。ゝハ大和のゝ法地ゝゝふ法を

ゝハゝゝゝゝふゝゝゝゝゝ法ゝ紀を。ゝゝゝゝ法ふゝゝハ。みゝぐゝゝゝれ

和ゝのゝゝゝへのゝゝし。和法の侘ゝひの侘ゝを法ゝて考和べゝ。

ゝゝゝゝゝ和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝゝて。　月　大和の。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ

ゝゝゝ。大和ふゝひゝゝゝゝふゝわゝゝ。朔月年。ゝゝゝ和きハゝゝ。

かゝゝゝ法ゝゝゝゝ法ゝ。　廿五のひゝ　ゝ葛ゝのゝゝゝふゝひゝゝゝゝゝゝかゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ。又ゝ近ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

ゝかゝゝゝゝゝゝ。　月　法白ハゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

いふぞといふ也。位をまがへり。
すながめもろこし　日　うたがひなき話にかなへり。よしうちまかせんはず
これ何も。すなはち考ふべし。
玉も八物なりき　卅六の巻　こゝはうちひきみしいふなりんさぶらはるゞ。
細流の説の如くなるぞ。拾遺の説も花の物にはあらじ。又おほひを。老
すがゝんといへるも物なるぞ。風俗古本にはて物。於比毛川久加尓
也於比毛川久加仁といへり。

梅枝巻

一くさながらいまうちなるゝ　六のひら　かほどゝのを信ある物なるべし。必
のとまへきよろし。偏りてかくよめば。のへまなりまれ。上にかくとあ

もばらまぢ八種の物なるべし。偏て物どもとよむ説をいみじきさ
ひがことし。さる得ぬき文やハまべき。
これの朱雀院　七のひら　宇多帝也。宇多帝は法皇を。さ後の法代
にうつらせ給ひて公忠朝臣にえらび出給へるとし。徒物ともいふ説
を兼平法門とせられるは。公忠朝臣。兼平の法代の人なるをの
まづきて語きの語をも忘れて。考へすんざりしにや。中々にいと
しれながらも。その中にも。兼平とたる時を。うつらせあひ
ていへるをば。いかで解すべき。うつらせ給ひてとは。宇多法門乃御方
を。延喜兼平などの法代より。うつらせあひて。公忠朝臣のこゝにえ
らべるにてこそあれ。そのうへ此物語の朱雀院は。すなはち兼平法門

に准へられば。前の朱雀院と申べきよしなし。さべくば朱
雀院とハ宇多帝をこそ申せど。醍醐帝ハ然申せる例も
あらざれバ。難きことなるとぞや。
言　霞ぶかく　九の巻　月も花も。霞のへだてこそうれ。さもなう
ぞハ猶ゞ見るもいとおもしろきに。見へわたりて。まだ夜の内なぐれに
ろびて。鳴つゞしとし。ほとゝぎすとハ。鳴すぐき夜の内ふかくへ経て
鳴よしも。さて渡りしまでも此方になりてぞといへるハ。鳥ハいまだ夜
の明ざるに鳴べしとよめるばかりそて。これハ鶴らば。実に明がたり明
見てくいふをさて。まではとハいへるも。
言　見ゑづらしとて　十の巻　花のかしきとハ。家の家に。見えらぬ袖にと

うらばうきて。なごりも。おぼろけにしめりにまぎれて。かくのごとまべ家
明り。たしかにゆふにうつれバ。春宮より贈る縁に拙き。花の縁と
えいぞりよき給へん。　注謂ぞ。
又なきことこそく　同　色やうたれ見づらしき花の縁をきてこそり給ふハ文
明きこそおぼしめさるんにて。これも花の縁と同じくしめりにまぎれ。　注
ぞし。あみしきものこそし。
いとはやう物語給ふ　同　源氏の君しハ。昇下しる言明るべき
そしらうりてしめりにまぎれて。花の縁なごおとゞしもこしの寄へる枝にこ明
きよりえ明らぬ袖なぞよき給へるハ。まだよめる巻の賞見りありて。
字おもしろく。いとしがりあるも。

さて先にて此のふ　十三のひ　女中達の女房ばかりの。こち
きこえやうんとその用をとし。
えうきかくべしやと　十四のひ　彼の人えかくべしよしし。
さうめもくぐのも女もの　日　女もしは漢文の対へ。方相侍るべ
を出いふ土佐日記のそば名ふ男もとをいふ日記といふ物を女も
してえ書とて。いつるんだへしてその方相侍る筆ものがち
ふも。彼字がちかも出ゆるうり筆ものもくぐめもといつり。彼字をとぐ
のくいつるハ。方相侍るべハまびき彼字出キもの。とるあし。
ぐんのかくこと　七のひ　ぐんハ綫字し。おきふ和名抄を引ていつりか
らこめるもいつり。

女ごもて行くきふぶふこ　十八のひ　さらひ女ろうんきてぶこ
かるもまして。歩て。女のもいもち行く絵だいくぐふくちぬべきに。
今源氏ろの帳ろのちくんふるハ本情しといひて。なり行ふし。
ちりびり　十九のひ　指きふ。後居かるべしそいつる侍よろくとも女
えだに。狂ぐて。ちりまるもの。ちりびといつるかるべし。

蓬末紫巻

ひまけかりく　三のひ　面白しし下ふんあくくきる風ふとなり。住
もの面白とこその侍ハちくぐまぐくつきあふおぐろうもし。
みのりめろ　四　ぐもぐえくきて。源るべきく會ハいぐふ笠。
きくかりし　五のひ　奥かりくし。指きふくこ。

おくしふかきを　日　せくふをわやまどろんとたつるおもむきも。
かなびきむかしにやゆらん　日　かもじ行なるべし。
此うたよく　八のうた　此句いづくんぞよくはなそくいふまつきつどなりては。
さらにくるしきなし。
ぶしまつほのかなる情などの　九のうた　まづ第の事うかなるあくの情なし。さて
ぶとつるは。下の句にある尖の事とあつるかなるをとへつまり。上の句
太だかなり。是が為めとくの心ねがとりけて。ぶしといふべし。
うへふかる此歌かな　日　花なふの事へるおもく。いづろきるを写し侶ある地
ありとぶろくは。春にあそびて心をちらし。是がむきめなるふかるこれを
うらひまつる。うちみづからするとうかなし。　侍ふ侗をえて。うらひある

とかるは人なれど。女の身へをあいふをぬかし。なるよしかなふいぞらわ祝
言ふさは。うちひあるそし。又そぞろきると。衰へるとてたるも。侶なし。
いはかなしてそえし　十のうた　催る楽なり。まちまどども出でもれ経ねやなき
出て。年ごろ肉太だのきびしく制し。うひしかど。金足するへまてしよし。
高き名残え　日　初二句は。上の夕暮なり。川口のとてそえしとのあを
つるるとが為て。高き名をいひ流し。給ふといふし。三の句。口といふに夕
暮はいひかけしる口ばてをわり。二の句はいひを此口の縁し。下句は。いう
あるとして。まちふ高き名残いひかけしあふしそぞ。おさましとし。
侶皆侶し。おきの説もあとひひ。ひあぐしとひ。かけしてといふを
べしかなりぞ。むかどてし。又後の説は。下句なきいとし侶あり。

ゆゑなくして　日　ゆきごめ降ることかぎりなし。父兄のきび
しく制し給ひ、法令さきをばとがめずして、こぐるがいふことをのみ
聞きやすふとゞめ給ふてそかゝるとき、やうふ、新ふのごとくなるせ
めひそといふし。如二百ハゆきごめ降のごとくもりふる物をのごとし。
注。倩案ずるに、詩きり。上の句の句は字成。倩見るかゝ。什字はんはる。
ものごとくなり。

ゆかぐ〳〵てとう〳〵　十六の巻　惜士ハ神をとゝ走る物ハ見てをり
給ひたゝといふし。次ゆるをもせか。第尼のをハなり。
号をとかるひ作るゝちして　十七の巻　作るハをつるををつるゝ倩見るし。う
ハ地よりつゝ作られだ作るゝといふべきよりわ。かるひをつるゝハ紙が

ひ号ふるの物るかゝわ。合くかるつるをつふ。
まゝふりをしふ　十八の巻　まゝあハゝをつるぬ物わるふ。表寒ふりつる
ふゝつゝとあがをし。又冷ゆるまゝふハ。寒の氣ゆるゆかゝ氣ゆるゆゝつゝ。
年月のわゞをもれ作るバう〳〵　日　日ゞ六條院ふ後て。をゝゝくわりをを
て。年月久〳〵わりゆる後ゆをゝるるバし。後ふ四ゝ上の脈を成又をわ紙
を出。年月のわゞゆをゝるれだう〳〵いるハゝゞりをゝハ語をゝゞをを
をゝ。ゝゞ業上ゝ四ゝ上ゝをゝくわりをめのひをわ久〳〵ゝのゝし。
むゝ乃例をゝうゝめをう〳〵　十七の巻　ゝりゞ倩べし。位ふ即紙ゝゞ太上
天皇ゝ号をゝのふゝハ此ゝ時ゝまゞハゝまゞ例をきゝるゝわふ号乃
例をいゝるハゝゝゝうんゝゝゞ。ゝ。ハ追号わゞゝ。淡路廃帝の淡

父舎人親王に盡敬天皇・光仁天皇の父施基皇子を田原天皇と号奉る説〜なほ思ふ所ありてこれを号奉るといへども、その説いまだ院〜中に定まらずべきなり。院〜今は御の院に准へて、院号に補せらるべき例を改めてといふべきや。況や例を改めてといふ説〜不改〜二説を挙らるるとぞ。されども大抵は改めて院号に補さるべき例をといふべきなり。又まことの上皇の例を改めてといふこと好〜ば例のまゝなどこそいふべけれ。改めでといふも好〜び。なほ考へ合せんこと〜よ〜ばし。されども此の外に朱雀院を上皇ふてまゝ申せば、その例を改めらるもあるものをや。

ふ所をこそ八〜 十二の〜 いとゝ古き。もし八岩を古〜ふ所ぞ世ちるこを
かなしう。

上巻菜花

ちるべきあとにけり〜ば 十三の〜 そをふかまふべきあるにけり〜ばこそ。
うををるを ぬ 十二の〜 上ふ年ふ月ゆく〜まふとけるハ十二月ふ月ちるこ
ろちるべ〜下ふ年ふけりぬ〜けるあ。ゆく〜〜第ちるの正月へうろ
まるこ。極月バ〜ハ十二月ちるべるるちなどのるる時べし。
ふ世〜ふもしさかりちみをふ〜ふう 十八の〜 ふ世今しもちる時ふ者
代の帝ち姫ふふ〜ふ世むこをえ〜びてうり給ふ〜びひたへもお
ゆ〜あるを。きて〜朕ち。もくうり位をきり。ふいまハ〜ふをうれ

家しきはあまたあれバ、むろをえらんにすまゐをあてがひ、すまひさづくぬべきにもあらぬみぐしのくまにし。さるハ年たけ女を、すげなくうちまかせてハ人々ハ嫁しにくさをよしとし、ほゞそれをバ、かゝつきつすべきを家につきてかくハのこしへるなし。侍づくしきがへることし。
かく流末くたなかりしにたん　卅四のひら　もとかりしハおぼろげにてやうたることし。
子孫(コウソン)のおひしげるを見れバ、おのが身も老やる心のおぼろげなること。
いかゞにつきても　卅五のひら　玉鬘ハ父まで玉葛君も後の母とし、文業の上をはなれバ何方につきてもあさましにし。侍従ふ桂樹君の兄弟かまがしくいふハいかにぞや。桂樹君ハうるふよしなきをや。
見給ひうべよかし　卅六のひら　うらぬとハ時くえて、おのうびく老のま

きぬるゝく見るうれしみぶ。
まして此ありさまも何といひがたし　四十二のひら　此ありさとハ上の源氏君の詞り。このひとかりハこのくまわりくらしくのこへるなし。
源氏君のみづからのは人あつぶえ定めなふまじきすゑ。家ハおくありしも何もいづくえ定め行られとし。さて思ふべきハ何かし。
すハてらるべき御家も陽気なるを行るべきなり。いづくにてもあるべきふみとハ何方をおくなりしとりおくなり定めんのことし。
いふひなきふうし　四　源氏君のよくつひしきを読みからひもおげるなるへるるをいふし。
今より後も　四十三のひら　此らしし此下のにたまへき文し。きなハさしわ

こととふよりこゝまでハ業平の人を並ぶにいへる文からいとめでたし
さよりハ冊子地よりいふ詞なれバ歌その堺にあらで八丈字の段。
おいてふおそしとて　第十八のうた　常本実申いへるおもく。俗言にきんきや
うたといふ事おほやうなる事おもねしきことしとねむきとしらむにて
つれ合きそん妬べし。さてこゝにいへるハかゞくしきさうしはおもしろく。
しかりねのことし。俗言のおほやうなるもそれにつゞきていふほど
ならへし　河海抄などにてし。指きに老らかさしといへるハ古本などし。
こと文おもしろきしきといふておのつからしきかなへり。
又年残あまむこと　第十六のうた　上句ハ徒人ぶし源ぎに身を加ぶむとの
歌にもまたいかゞなりにといふことし。下句ハ徒人ぶし歌まてゝに

源きなうバ昔は須磨の浦にまさりひかりしきらだにも。ころとばしてか
わもえんなまるやうも行るべらまで。まこの源きたんたハわしさまバ。
今さしわがづしふべきに行しぎといへし。須磨の縁あり。波といひ。
須の縁にかぎりといへり。須磨もいかなるにおとらず名かくし。
それよりかみなる人やハなべき　第十七のうた　此語いふぞや其句。上文よりのつゞ
きぬまでみるに家も親王はた女にて。今まで源氏君の如の物かたりて。文
あらぶ人もなくてあらひそまバ今さらし人を上にしるして。あるがにべ
き身をハ行しぬものをといふことなるべし。
第五十三のうた　第六十のうた　下句ハ紫上をさしへるにて。あとハ下なるし。
語句ハ萩の人にて八名のうるまるてし。それへるこ八。思ひぞなる泥あまし

きゝるよしし。

日ぐかぎり　六十一の巻　[illegible]

どとうぬさふふ。つぐきてよみべし。さて[illegible]

但乃巻[illegible]

きんをいぐんねぐ　六十二の巻　ぐんを下　六十九の巻　かがしたあやのうたぐ

んふ。[illegible]ぐんと日ぐかるべく。せんをいも。泉水の絵ふをうつ

ぐ。四季の絵[illegible]。泉水壇をぐいひ[illegible]べきふわ[illegible]ぐ。せんをい

を。ぬぐ[illegible]。[illegible]やわ[illegible]む。

よひのわぐをとかぐへ[illegible]　六十五の巻　今又[illegible]二人の[illegible]ぐとも[illegible]のぐ

[illegible]。三[illegible]びて華[illegible]。[illegible]氏[illegible]。[illegible]よひのわ

ぐとかぐへ[illegible]し。

手ぐろひぬひふる　六十九の巻　行[illegible]手をぬ[illegible]バ功[illegible]

ひ[illegible]。[illegible]れぐ。[illegible]の和琴も[illegible]ん[illegible]

やうふ[illegible]。[illegible]ふし。

いとさるとる絵[illegible]や　七十三の巻　さるとハ[illegible]。[illegible]べし。[illegible]

[illegible]ぐ。

[illegible]人をぐ[illegible]ハてふをた。[illegible]ハ得[illegible]。

[illegible]月をふ。[illegible]。[illegible]。[illegible]ハ[illegible]。[illegible]。

[illegible]ひ[illegible]をおぐせ[illegible]　八十一の巻　[illegible]ハ[illegible]の絵[illegible]べし。

[illegible]ぐ。[illegible]の絵より。地の但ふ[illegible]。[illegible]の[illegible]。

おもろをかくでハ　八十三のひら　細流のごとく　茶器、書画、かもけものく
ひのこと例を、拾ひ出すふるつし。
ゆくすきかひごとかはるとど　八十四ページ　けゝ為あはせ、赤ゑ入り主人ハ代りハ
つそのうかはるバ、ゆくしきかひごとくハのこまふし。
よとゑ為ハ人の　九十二のひら　りとよりまるべく、えさしぬ人まハりぬ他人を
いかし、よとこいふハ、ゑ見ハ、よそかかくりぬいふし、つゆふりきこと
いふとハ、ゑこし。　ゑふ、船をる他人とりハいで、船をハてふりかつぞ。
さくそうべふをんぐ三ぎかはるく　日　ものゝ清てよむべく、清てハこと
ぐしく、伝そのこと。
ゑとりく　九十三のひら　行ゑふ、ゑ一人くいふこと。

そこふこそこそこく　九十四のひら　こくといふこく、野ゑ上ふこぶむう
ひそのゆ相ゑハ、ゆく、字くゆ相ゑかりまる。
え為の名為くぶめるハ　本為ゑ　をべて為の名ハ伝ふ、ゆいがいまるといふ
ここそ、こくハ女三宮の伝方へここうゆ為ふこ、ゆいゆ為るゆぐふを
あくバ、こをべきゆ、ゆいゆんふぶふえかくゆ、ゆ為くこくいふこ。
ゆいくく紀ゑがこし。上ふこくべの伝りづきのこ、名でくてこいひ、ゆ
かこぐけきこぐしくいひ、んぐくくといる為ぐふかゑかぐ。
ゆくちゆ為ふこく　日　耶輸多羅（ヤスタラ）がこくけゑ、河海ふ、或勘文そこ出
さこくこりこふよくかゑかり、ゆふべし。
又ここふこちゆきぐふこぐこりこく　九十六ページ　心のこちゆこ、人ここ

ぬるひの行る人もまる花やう形る所うまで見ばすゑふ見てハまて
ふんゆきておもゝろゝとゝふゆゝをもまゝ流ハかゝへの思ひすきく
人ゝ見ゞやゝふゝて〻ふゝまゝゞ〻みるゝ形やふゝゝゝ〻ふゝハかゝく
のくゝ花やう形ふ〻うをて〻〻ゝ〻ふゝをもハ〻ふゝをを信まゝ〻ちゞ
らゝハ年等ふゝて〻ふゝまぬ〻。

たちぬゝ　九十八のひゝ　めのとごゝくハ乳母ゝ見ゝて〻ゝ〻ちゆゝハ〻を中
ふゝ〻ゝ的の乳のゆゝ形る子〻。
ゝ〻行るかゝ見ゝ形ゝ　九十九のひゝ　鞠の懸ゝ見ゝて〻ゝ形ゝ形ゝ見ゝかま
へ造ゝハ後のゝゝゝゝゝゝゝ〻ゝ此物侍のゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ鞠蹴ケふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ行ひざゝ鞠ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝハ竹ゝゝゝ〻ゝ指きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝぎの信ゝ　ゝ形ゝ　指ゝふ萠本形ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝいゝ形ゝバゝゝ　ゝ云のゝ　二のゝハ法本形花ふこゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふふ祢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝ形ゝふなゝゝさハゝゝゝ。桜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
桜ゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝむべゝゝゝ形ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

下ゝ菓ゝ

いとゞやはぞ　二のひら　はぞゝそ法を切てゝはべし。はぞかゝとつゞくかゝ形を。
まへちりへりのもろ　日　ゆしふきてゝし。
いとりきてゝし　三のまき　ゆしぞ一本ゆるゞけのトふたのゆ行まで。それ
もゆしぞいとりしきを字〳〵俱まるかや。
孫うゝ　六のひら　指さはぢゝ
うゝそもちゝむる和　日　こまる指さのぢゝ一本ふちゝむるかゝる
あまどぞ和ろし。和ろひを手もむるうてハ和ゝ点まるとつふも多ぞ。
ちゝふ和ろし。和を　十はひら　はトふとゞ義ゝる和るべし。
てゝ和るきぢ先ゝかまで　十七のまき　指さゝろし。うぢはもハ低ゝ先ゝ。
手ちゝはちゝ　十八のまき　ろゆちゝんゝ。ゝひゝるハ。表ゝはちゝ

よせゝるハ裏ゆて。表ハくぢ。位のはろ海人をまバし。
かゞゝおもて　十九のひら　ゆてぬゝし。或人のいゝゝ。かゞゝをのゝを字
濃まるなるべし。
うへのきぬのいろ〳〵ゝ　十のひら　源氏ゝをちゞ先て。紫上女院教夕
雪ゝ四ゝ上和ゞの料の懸盤を。口位五位ゝ位のうりつゞきてゝたゝ
ぶをいふなるべし。次ゝ尼ゝの料をつるゆて考るべし。さてうへのき
ぬの色をもているハゝりをこぶゝ毋をゝんゝるゝろし。きぢめおき
てゝいふゝ。源氏ゝのよりしてゝつぎゝはゝ方ゝのをゝりをこぶゝ人
をゝもつぎゝ和ゞ日ゝるゝし。ゝべて諸ゞろ形まバゝやうはゝゝ
うも。はゝ日ゝハゝ日まてゝうゆやるべし。指さの説いゞゆ。ゆ一の

説のおもむきハ、ふぐみ位に和伝云位とそいふべき歟。人の衣の色
色ハ、よろしき歟。又源氏名ハ、方くゝ、おゝ人の和をいたゞきし、尼君
のゝ人をいとんとゝ、いとゞ好ましぎや。
まゆびのおもてありて　月　おりてハおしてのゆるべし。俗ハいふ張り
付法ゝ。河海の説乃ごとし。　和漢の説ハ、ものしぬゝ。
うちはみゆゞさへゝ　廿三のひゝ　廿上ハ、ゑハかゝ、ねゞいふゑなゝてハ、
あゝゝゝいなやゝし。
さいへゞなゝびき　廿九のひゝ　廿六のひゝ　源氏ハ和漢ゝ、ようゞの事ハ、
うゝゞゝ、ゑきゝゝ、ゝいふふいるゝて、さいへゞゝ。　注説ゝ。
まゝはゝあゝの孫をゝ　廿四のもゝ　まハ、わゝゝまゝ、ゝ説なるゝ説まるゝ。

かきゝゝ、ゝる孫の　廿三のもゝ　今も、ゆるがゝ、そ、ゆのうゝふてなぬ
ゑて、ゆるゝめゝゞひきゝるべし。
ゑの中方ゆのぞき給へまバ　廿三のひゝ　源氏ゑめゝぞき給ふし、夕雾ゝ
いふゝゝゑがゝゝし、ゆゆのまゑ、夕雾ゑハ、簾のゆ、ふゝゝふまゝゝひ
ゆふまゝゆ野まバゆ人まゝる所のやゝふ、内をのぞきゑゑふべきゝゝわゝ。
給きふ、夕雾ゝゝて、ゝ俗ゝいるゝゝゞも、ゆゝゝぬゝゝし、ゝゝふ
やゆゝん、ゝゆるをゝて、源氏ふゆゝぶるゝて、ゆゝゝゝしゝいへまゞゞも、こ
まゝの御、源氏ゝて、ゆすゝゆゝん、衆のゝゝ物まバゝゞめゝゝゆ方
方ゆ衣物をゝ、ゝゝおきゝ給ふべきふゆゝゝざれバ、光氏まのぞきゝゝ
てハ、必ゝそきゝゝふやゆゝんゝをべきゝゝし、又いゝゝゝ、ゝゝさ

老のうらゝいふまで。さてふぜいうるもとぶり。おゝをれうを
ゆるおぼゑゝいふまでハ保氏卿のえすふうゝ後をもていうるふて。こ
きもかまをうゝゝいふうわぞ。夕雾ゑのうすかをゑる。大おもと
ゆる。うゝゝじ況ゆてもうるべゝ。上文の保氏ゑ物うふうゝべて。大ねゝ
をし。をべうゝまひをうるゝいふを。を形をゝゝかをゑんざれぞ
も。ねるゝへぶてゝ。そのゆうゝわをゑをうるをゝをいうり。ゝをバ内ゆう
ゝゝハいうり。簾のかゝふを立て。内をバえんざるゑ又ゝ鬼のうへの。ゑゝ
をわうゝもうゝゝいうゝをても。夕雾ゑハ此物をゑんざるゝ時ゝを
ゝも。ゝゝかのうをても。此物ふえんゝゝんふをゝがゝハ思ふべゝやを。
ゝをこのゆうをてゆん　此ゑのひゝ　ゝをゆんゝいふゝゝ。穏ゝうゝゝも。ゝハ

をゝうんを。寒ゝゆやまわるふや　一本。をゝゝをなんも。ゝゝ。
ゑゝゝきゝゝみふゑゝゝゝゝ　此八のゑゝ　此一のゝゝふ撰ゝゝゝ。
みるゑゝゝゝ　此八のゑゝ　いゝをもゝゝ。耳おゝゝゝゝをなきよゝも。ゑと
ゝゝハみゝおゝゝゝへゝをもゝ。後位ゝゝ。
かゝをゝふゝをて　日　かゝハ撰ゝるべゝ。ゑゝゝゝ。
こゝらへゝゝゝゝる　日　ゝゝゝふゝふゝふゝふゝゝゝふゝ。
ゝゝゝるべゝ。後ふゝゝふゝるゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝのゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝゝ。撰ゝもゝゝ。後ゝゝゝ味ふ。ゝゝゝ。ゝゝ楽器の中
ふ琴て。琴ハゝふゝいふゝゝるべゝ。ゝゝハ中ゝゝゝゝゝゝゝゝ

はくくとをへだし。

五六乃そ〳〵　四十二の印〳〵　たゝうちちさどう形〳〵ぢ。たちかそもだ。

を留るハ印がごとし。さて此る。近き学ふこきれ従ぐもけまぞも。

ゑ〳〵形〳〵ざるを形を〳〵バ。〳〵ふをいづさど。

かやう形るを〳〵ぢいひわつをてる　五十一のひ〳〵　ゝやう形る。ゆ〳〵ぐ〳〵。これ

を。ゑがやう形るとを〳〵。ゑ。ゆ〳〵ぢ形ゑるなるべし。

いときよう〳〵ふちんおそ〳〵ゆ〳〵　五十六の印〳〵　こまいいときよう〳〵ふおり〳〵

まして形ぐゑべき形ゑ。本のまゝゆていいぐ文よく見ちん人を。

和きまふぐ〳〵。

なふちふなりつ〳〵むく　六十三の印〳〵　いう形るこゑふて。なりつ〳〵んと見ふゑ。

形ふ〳〵ふを。伝のゝと先ゆ〳〵いふをゑ。但毒従ゝをふ行〳〵ぢ。

う〳〵〳〵んよハあ〳〵ぢをんおゆ〳〵伝る　は　世下ふそてゝいふ何ゝそてハ父と

ゝのひぐ〳〵。

印おきてゆく〳〵ゑ　六十四の印〳〵　括きかむりふべし。

印　赤月てそゑ〳〵　七十四の印〳〵　それおぐ〳〵ハ。原氏石ハそのゝをゆきくの

月形ぐ〳〵ゑ。結月ハそ〳〵おゆ毛〳〵形ふ石ハ括そのゝをゆきくの石ゑ。

ゝいつるゑ。さて赤月てそハ学ふわ〳〵ぬゆふ形りゝを。石ハそのゝ

ゑゆきく形る仕月ちを〳〵バ。ゝり形ふべきふいう形を〳〵バ。ゝう〳〵あゆ

を毛をバ〳〵ゝふぞ〳〵。ゆ〳〵ぢ形ゑるゑゝ。

ゑ。ほ〳〵ど結〳〵の〳〵ゑるこゑゝ。　七十一のひ〳〵　こゑて〳〵ハ。ぢ〳〵ぢそ。病者

の祈りふのをきるるぶ形るるふ。死霊の追福ふハ形〳〵ぬし。
おめけはおがえ　七十二のゑ〳〵　もと朱雀院のみかどの。いと〳〵かゝづき
なり給ひしほどのはおがし。侍臣とぶて。
らゝろ〳〵　七十四のひ〳〵　やしがく〳〵。
うゝ〳〵人まそぶゝ　四　こゝまハ葵上ぬけはの事ふたり給ひしうゝ
をの〳〵ふし。臣ゝ形ぶぶ。ゑのうわがる〳〵かわ〳〵るぶぶうをいう
でゝハむ〳〵つきうわ〳〵とゝまでハおがゝん。
ふひぶまれるべられぶ　七十六のひ〳〵　けアふ。ともじゝをべ〳〵。
さばうゝ人うゝ　八十四のゑ〳〵　指き形ぶこゝし。
内よりうゝびゝ〳〵ゝ　八十六のひ〳〵　女三ゑはゝうゝ形ぬけはうぶ〳〵ひのはは仕うわ。

乗臣の侍いうぶ。
ぶふうるがうふふふ人のゝゝゑふゝ　八十七ぬけゑ〳〵　けあの侍。ふ侍ふきを。
稲掛、大ふまがいゝゝ。まびがぶゝハ上文紫上の御をうきゝるし。けるぶうち
ふふふふ人ゝハ紫上ふあゝ〳〵のゝゑつるあて。紫上の女三ゑはわるがうちふ
大切ふふひのふゝし。さてゝその紫上のゝゑゑんふゝ女三ゑゝゝゑうぶゝハ
しゝはゝゝがなゑぶゝし。ゝうびふゝがうふきゝゝハ女三ゑを大
切ふふひをう侍ふけるうふ。さゑぶ〳〵ふひやゝをふきゝゝうれゝふなう。
ふやゝゝゝ人のゝ〳〵ゝハ女三ゑふつきゝる女房形ぶけふりんゝうゝをさ
へゝやわんかゝやけるんゝ。ふひゑぶしふをし。ゝうびふゝがうふきゝ侍
きゝゝゝハ。即此ゝし。さて紫上の志ゝをかぶうう侍きふ。ゑかんぶ〳〵ハ。侍

しといへんとて、えぐ〳〵まる〳〵をとりの〳〵ゆふし、さてさべてのさはつぐ
さていたぐ、女三ゑをひるがりふた切ふ思ひやりてゆふ思のしめゆを、女三
ゑハ、ぐ〳〵ゆ〳〵ゆ紀ゆをが好きぐも、さともおがさで、さばかりようげう
つとりかまりて、おかよそその女房ぼぐの思ひんそろまで、やう〳〵や
〳〵思ひやりとゆゆを、とぐかり係きるりゆ〳〵のゆゆし、さてかく
実ハ、紫上〳〵女三ゑしのゆりゆりゆ好きぐも、さべて係のうへを、ぐ公
界ふてのゆゆつゆゆて、おかよそ人〳〵いひ、又思ひめぐ〳〵まる〳〵をとい
ふも、係く〳〵思ふ人のしゆふを、ゆ〳〵まで思ひえぐ〳〵まる〳〵ねるをと〳〵、
公界ふてのゆゆつゆ何し、〳〵いかり　ほ、ところ〳〵ぐ、ぐ、ぐ、
こゑ〳〵ぐ、ふ日ゆ〳〵　日　女三ゑへ、紫上のんぐ〳〵の係きふ対へ〳〵係氏

ゆゆ、みぐ〳〵ゆんぐ〳〵ハ、係きようし、紫上ハゆゆ女房ぼぐの思ひんそろ
まぐ、ゆ思ひやりとゆゆふ、ゆをゆ〳〵ぐふ、ゆをゆ〳〵ぐ、ゆをゆ〳〵思ひるをし、
をゆぐかるんぐ〳〵ハ係きを〳〵思ひるをし、
いふかぐゆるをゆりゆる　九十のひ〳〵　けてふををゆゆるゆ係きふいつる、ゆるをし、
〳〵ぐ〳〵先ハ別ふ一経のゆひざゆて例をルをし、いふハ係ふいゆぐりう
〳〵いふをし、
ゆりゆ係ゆ〳〵ゆ〳〵　四ゆの庸〳〵いふふ四ゆ止のをハ、ゆ〳〵ふゆ〳〵、
〳〵ぐ係ゆの庸〳〵〳〵いをもゆ〳〵ぐをし、
ゆゆ〳〵ゆに係ゆ孫きかをてもゆ〳〵　日　をべゆ〳〵通向ハ係ゆ孫く一切
の品ゆふ及ぐを拙ゆを、ゆのゆ〳〵ふてゆ、係氏ゆ係いぐいゆし

なりむまして年ごろの契かはすバのたまひし。此ハいとゞ見ぐるしがりたまひし。
えづかしおもひまどひ 日 衛門督は上るよすがし。されバそのまゝうちふ
てぶんづきなしやとのたまふ。またふ此督は上るはじて人に
おほせて。え姿むもせぬ。衣身ハぶんづきなしとぞ。
ものをんがそ宮ふて 九十の哥 をもおどやかなるぞ。
九月ハ院の太后の五く 日 此太后ハかくなま給ひつるすハいかにもあらさ
系てなし。さ程ふかきおもひしよりハ。上み葉末ふ結びて思ふ。
いそがしくはく〳〵人のふく 九十の哥 くぐハ何ふて。人ハかゝるへの
人なも侍ふ。くぐうくくして。これを柏木といつるハいとゞ恥ぢがこともさ
ていとゞきしくはく。めでしなきをへりつて。人のいそがしくはくて係

氏君はあしきやうにのたまひしはをかくによりて給ふとぞ。
をいかなれバやさしかりて 百首歌 柏木君のうすし。後に紫上女三宮
ぶのまもといつるハさぞか。かし給ふバかりかはりて、とてをかゝるべき
も文院みちさだといつる。さうもさてハかくなるぞ。
かまもし 五十の歌 女三宮も柏木君もといふとなるべし。給ふ
でハ此句はいたくし。此ハみづから。

柏木巻

柏かしひし給ふおもひぞのこゝし 六の歌 後かにハ花やかなる世ありて。
柏かしひみじ志のふおく〳〵なる。柏木君の宮〳〵見づかひおふをかく
てから系なまとる躰志なく。志めやかに細ゆして。病患のおもき。

のこきちふうこしひきふがけりとしくいふし。ほうろう。又指きの説
さ。おくぐのとりるの。ものふかなぐ。けのハるふくいふやうはとかり。
もしかの説のぎくハ。おくぐかてしとうおくぐ指ハとてそるべなど。
あへちん　五二のひく　指きふいつるごくく。搭ちんの。ふて。信云ふ。かんかん
の指るくいふくいつくもり。
ぬしろいちんふそ　月　指きふ。ふろろをてべていそぐし。といつるごく。
おぐろ。まもちくかく。で　五七のえく　指き説。ゆくふ。ほし。上ふもいつり。
は。鑿けりきふこそハく　月　ニハ次の法をへぐく。はっと行ふ。とふとへうまり。
ん傳ーと思ひ。ひ一つ。　五八のひく　ニ。この下に。かん。もハぞ。とそべ。ど。
こもくれ何ちくハ。指つりきくとそべきてふをそし。

いまく。ふきちぐかりきれど　月　此ハ。指本元は喪の中指ハ。ふくれ
ちぐ。忌べきをわふあくぐふ。かくいつるハ。こをハ諒寫は与かる有
り。おやゆまのいくれそ。かりてし。
ちぐれ六動ふ　五九のひく　湖月ふ。ちぐくりるハ。張し。父ふ行くし。
おやのきくよりるふ　月　きくハ孝し。ちべて親の喪を。孝くいふし。
ものこくあそも知いつり。ふハまそりてのこし。　ほいつる。ハこくふ
そ用かきこし。こくハこぐ。ふ長の。ふれくふやつを行ふこるの。いこ
しきばいつるのこふて。ふ。ふこハなく。ふのけを。ほりて。まこふのこ
ふいつるもふごこし。又指きふ。きくを。ふいつるも。ふがこし。
ふりくかくば。　四十二のえく　ふくかくばのるハ。別ふいつり。ふれこハ。指本元

のちに言ふまつれバ、ゆるしまするとおもひして、節家をほどくハ、
此座の柏木までの程ハ甚しき事ふ、こゝろしおくりしまへりしといふなし。細
流、いみしくもがな、抜きも、こゝがなすな。
ちかし　いふにえし　　日　流兵部乃宮也。
ちかくいふか　　四五のひく　近きハ柱木兵のす、遠きハ、保ちつめすなり。
此つのすハ近き宮とつふ、遠きといふそ、もちすちくもがなつるやうな
もどりも、絃ハも、近き宮ならちふても、柏木兵の近きふらぶまバ、宮ふ
きむかしなるバなり
　よくめえの光
流宮　よ絃まり絃ちえし　　三のひく　　抜きふよ絃まか遠ハ、筝の縁といへるき。

いまだ筝をいまでよくのといへるハ、いづぞの縁なりん、木ハ地(トコロ)ふよせて
またいふそへるなり、入なんそハ佛のそれなりなひし、乗花ものなり。
いるこのとかの那　六の弦く　かとつる説ふかし、もりいましき、細流見もし。
ちむよ出てえし　　十のひく　絃白のをかじふ、つらでハそのかぞ。
ちゆうひふ絃えし　　日　四の白、琴絃をへるハ端なりぞそまハ裏なる絃。
表ハ、ちとハ、バりなるよりふかずふかし、よしハこれを琴まを表ふ出して
いるるりや、持ちし考ふなし。
こまハかすぞゆくなり　　十二のひく　此笛を吹んてハ、すぞゆくなし。此笛
をつるへんてハいづとなし、とつる位そもがなす。
ちの笛竹ふえし　　十四の弦く　三の白、上ふまし宮なれ、ちとなるバなりしの杖す

うしの時ばかり、ほど近し。ぬかづきてもとべし。
大殿にて　十六のひ　てそは、さんの毛ふ六位の毛にてなぐさし。てそし。
ふしちの所つゝふハう　十七のひ　葉ふも原氏ふの、ものはあ羽とバ、ふゝ
ちゝハ一きざゝおゝとべきゝハかゞせども、女ふハ、柏木ふのあ
ゝおゞもふおゝきふゝやかゞんゝし。

紅葉賀

みちゆきゝほゝきて　二のひ　かゝゝとハ、寮御和せうゝとハん
えぬやうふほゝくゝしるし。寮をのぞくしゝふにハゝかゞ。
ゆやのようひみて　五のひ　こゝハ侍腰のもべてをいつし。侍ほう。
袈裟ゝいつるハゝかゞ。さてハ、ゝいふ御ふうれをゞ。

まゞ新ゝうゝる　八のひ　月ハ月ゝかゞ。まゞ書ゝてゞる女ふ新のさく
ゞるゆゞし。下ふ月ゝ出ゝいつるハゝゞふ新のさゝそゝるし。
ふ大ゝ話ゝ　九のひ　話きのゞゝ。ゆゝ下旬の院ハいゞ。
ふゝ後もてゝ　月　話きゆゞゝ。
女ふんいと話ゝ　月　出家しゝ話ゝゞゝ後し。
ふ月ゝゞ八ゝ　十一のひ　院の白ハ誰ふもゆゝ月をゝる人の新ゝゞから
ゝて、ゝゝ大ゝゝゆくゝし。ゝがゝいゝゝ。ゝる月ふ到へゝ。ゝる人のこ
ゝゝゝゝふゝし院のみゞのゝふ袖ゝ出なゝゆる紙ゝきて。
まゝゝふ紙おゞゝ　ゝゝゝべきゝし。ゝ移る月ふゝゆハゝれゞゝゝる人
のおのゞやどかゝふゝゝて。秋の夕ひゝゝゆゝ行ゝゞし。ゝゝ話ふし。

下ゐ原氏云はく、みづうゝはるかにしるハ淵し、みづのうゝはるか
ゝ、はるかにしゝふゝ、ゝ次うる例りもあれども。

夕雾さ

ゆふ〳〵はるかにせうそこう　五のひ　指きのだゝし。
おもて　六のひ　藏（オロカ）なてしいふこしおもしくしなどもいふか。
ふるさとあれゝさう　九の月　指き考ぬ也し。さうといふ古栗栖野ゝふ。
夕雾ふるゝ領のつる沈ゝふし。今号ふゝで行と和く。某所といふと八異
六の月　ゝのこやう　十三のひ　山のこハ、あばりといふこふたつゝび。ゝ
とゝはるこし。柏木ふをしるゝへふ。又夕雾ふるをて。ゝうゝふやえ
をゝうゝをゝべき。をハるまゝ。きるゝといつるし。

先さゝ〳〵ゝの和りをゝ〳〵さゝよ　十四のひ　義宗ゝの。柏木ふ。ふを指
つるんを。あれば〳〵先さゝ〳〵ゝ。ゝをゝ。ゝおぶせるし。そゝんのゝ位を切て。先さ
まきんゝて。ゝかゝ和りゝ。ゝるぶさゝよゝといふし。
ゝゝゝゝ　十六のひ　下のどもハなゝてをべし。
ゝゝゝ　月　今ゝゝ指ゝ。ゝ。ゝゝゝ風きばゝれ
あゝ〳〵。あれ。ゝんゝうゝやせんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ和ゝて。あれば〳〵ゝおゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てはみゝゝゝゝゝゝゝふ。あれば〳〵ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
（ゝゝゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ　十七のひ　指き得ゝて。決ふ。ゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。法ゝゝゝゝゝ。

たらちし　十九の歌　語きこゑ。致をし。出れよあらば。
ことよや　曰　語ふ。そもよく、いふがおもし。曲もいひ出て。いひつべきを照り。
今もそもよといふも。
まいていふひろしらく　六十三の歌　義してわざしる説よろし。　異
花も語きもよろし。
あげしよるれんもそひて　六十五のひら　語きむごとし。
きさやうなるきし紀かもつらで　六十六のひら　語きさなおもし。
そさあしげふらちよゑふ　曰　語さ。いみしきむごとも。
こよひもつきなきをこゑ　曰　語さ文いとしきむごとし。
おきるなる人ふげしこゑ　六十九の歌　曲るき抱深りしつるすなるべし。

さくらふ代ゆくの　曰　のすし。あく字し語まるべし。
いろそうりてしかなし　六十の歌　下なるどもど。行するべし。
一求のこ山風ふこし　六十一のひら　なでもくいふ詞。語るしば。まなを。
なさとくいふまでハ。雲居なりが夕暮るふしでや語ふ語のさまなるふ。
そも成やがて。落葉家の此ありへ。こしと次えくりしとハいうでなわり。なやま
しきなでもとハ。かつきへいひやうと語ふべき語のさまふならば。文よく
見るをあるん人へき。そえまへつべし。
ゆうへうらして　六十二の歌　ぎも隠して之。住ぞもうなるぞ。
ゆさやこもふ　六十三の歌　迷る舟も。何そもいえば。おしこ見て。むる
ド川鶴るきなる詞なて。よ川のすふまことふ用る詞とこくハ

まゝのはなにせなに飛ち。くすれあをともよくみゆ結びでしらでなく
もくいかしこめて飛にあしゐにかやといふし。但何するにかなしむ。
是がはあやすちかくなゝに　三十五の句　是が八は忠所の是が加へにはくいへる
いかゞ。
ないすべしみしといへど　三十六の句　ないすへ八ないへすへ加るべし。
いふしてかくかそへふと　三十九の句　どハゑを語る加るべし。いふし
てかくふそらふえからとまつるぞくれくみえしる語む。此次もあれ同
じつゞきぬ語すれど。是ハいふべき所ありわりがね。
いとはんのいろすがら　四十一の句　いとハいらず加るべし。
月ごろへ宿れど　同　月ノ字ハ日を語る事で。日ごろへるとバ加るべし。八

月よりた月にある間を月ころへてとハいふべきにあらざれども。
多いづもとくらく　四十三の句　きえかゝるはきゆるてはよくいふなく。
ふきかへる花にかへるなどいふをびみなず。
ものこれかゞも加るとど　四十五の句　ものこ乃と切てよむべし。文章なれ
のぬるふとのこの水ぬ乃ぬ承前へかゞもなれともども。
いふひすきれらくちおゐ　四十七の句　ちかろを語る加るべし。
かく厳は是加きの　同　無は忠顔乃は別也。極本に花也結ぶことなるは
ゑらし。
多置そゑこく　同　語や者ふべし。
とぶらはふとし　四十八の句　語や引ゐなかむなどし。
多かめトノく　五十の句　あれしの際。此句にては。らで小此にかゝる際

のち 世にいるだろう 世で、考ねしといふふ、こゝハなし、ゆえぬるが風
やしなひ、ひとりをとこいふ風ろうんといふし。
さわらそて又ゝ 六十六のひら ことさらに、朱雀院のおぼし考をれんし。
ぶこのうふうわて 六十五の印 このうこといふこ、ゆ、ゆ、ゆ

[illegible]

のゝ[illegible]ちまふよるし。一そのゝ[illegible]ハ、[illegible]ハ[illegible]

いとしゝ。危ふかりしゝ。[illegible]

ぞとふ。[illegible]

[illegible]

[illegible]ふるれたのゝ[illegible]ハ行し。こゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふるねんぶつのこゑ　ゆるぐ　おくうわとまぐ〳〵　仏のおぐ〳〵　ものむごと
とりべり　ほきふりこ　ものぐも　こふねてハこしぞ
ゆ　繁の色やう　七十五のひ　二三の白ハ柏木ハ〳〵せゆまで　ゑとバ　ものの
うちふるぐめおきて　ゑとれざるよし
ゆ　伊勢ゆゑ　七十七のひ　ゑぐ　ゆるぐ　一つのゑうぐ　いふ　組の　ゑと
てし　ゑて　ロのゑハ　うしめ　ときく　ところ　をう　を　ほるハ　ゆと　ゑひと　ゑし
をうけくわ

伊勢花

ぶ　ぶ　ぶ　

で結ぶを、同じ院の四ろ方、紫上の寢殿ふるまち、其ゆふべ、れ
ぢかうて、ふと、つゐ、寢殿〳〵、東對〳〵、又、未だ文り、ほが方〳〵
いひ、あるべきこと、みな二條院の四そのゆゑ、東對をいつるし
云條院ゆゑ、ハ、つゐて、そこ、又、ひ、所を、紫上の御〳〵いつる、ハ、あるべきふ、院
らせ給ひんも〳〵いつふ、れそで、ゆゑ、紫上の御ゆゑ、ば、こ、ゆ〳〵ふとそそ
きべ、ゆと、又、結きふもいつ、ぐ〳〵、なゆふて、結ぶ、ば、そそ〳〵いつる、
紫上の御ゆゑ、ば、ゆゑ、て、結ぶ、ば、ゆ、ゆ、ぐ〳〵、ゆゑで、ハ、御ゆゑ、ば、
住ぐ、も、こゆ〳〵、を、ば、ふ、ん、ゆ〳〵、と、ゆゑ、ふ、ゆ、い〳〵、ゆゑ、ゆ、ゆ、ゆ、
月、ゆ、ふ、の、ゆ〳〵、ふ、ゆ、ぐ、し、ゆ、こ、ゆ、ひ、ゆ、ゆ、　十七ひ〳〵　ゆ、ぐ、し、を、ま、で、ゆ、
源氏ゆ、の、ん、を、ゆ、ぐ、ふ、い、つ、る、文、こ、ゆ、ひ、ゆ、ゆ、ゆ、ハ、冊、ゆ、地、ゆ、ゆ、い、つ、る、文、ゆ、ゆ、ゆ、

その場、ゆ、き、ハ、い、ぐ、ゆ、ぐ、し、を、の、ゆ、ゆ、ゆ

ゑきさけつ　三のくら　川避すり

ゐ夜ごはもう　十五ぢ　大まがいつる　そくみち　流さし　ゐひを例め

火りうて　火ぢわとも　ちわぢ　さむうこと　ゐて　ゐひのやとまると　流むと

いつる　夜ゑりしかち　ちかへく　流しきふる　ぢよせて　ゐれる　ゐひの

やきさしびると　今日ばうわ　ゐひをやとめへくとあるし　といつるよ

ろし　住ぢふぢうわ　いふうれそど

ゐさとてそいう　十六のひ　るべのあちる　指きふいつるおく　神乃

託のふみかて　べき　ちをへる　竈し　ゐちとる　指きのおく

ゐて　下ゐさ　ゐさへ　まとる　ゐれのふをいわ　ゐれるよとがそうふ

ゐとこ　ゐわり　ゐるきぢと　ゐべく　ゐのいくおろそうて　おびく

ちくて　さぐう　ゐれ　びいはぐきてぐと　し

ゐつるぐくえう　十七のひ　かぐ　指きぢく

ゐふ　ゐれぢ　ゐちえ　日　ちとく　ハ　業上の　ゐう　ふうて　ゐ合ゐ　ゐをとえ

ぢ　ぐぢ　ゐ別出の　今ゐの　ゐふ　ゐが　ゐく　ゐの　ゐをぢ　おきそうる　し

いゐくで　ふゐる　ちゐゐう　ゐの海ふ　人の　ゐるう　ゐち　例のいく　みぢうし　指

きふいつるが　ちく　後のおぢとふも　ゐめく　ふ川もる　いく　おろそう　し

ゐゐ　ゐきとう　日　業上のゆく　をちひふ　ゐふ　ゐふ　大ゐ　ゐふ　ゐふまう

せて　ゐふが　うく　やる　し　ゐし　決の　ゐふて　もるべ　し

ゐちく　ゐちう　日　ゐの　ゐ　ゐる　ゐて　ゐ　ゐ　揚ゐ　ゐが　ゐの　ゐう

ゐ　幻術　ゐ　ゐ　幻術

京北にありしかば、いとくらるゝものゝ、
まんやうふつもわふるゝ　十三のとし　かつ清みぐりせぞ、をゝくとおもつ
もゝしいふるべし。

雲居雁

此老は、名のみ有て、何ゝ、まゝはゝ北方の名ふ、源氏君ゝ方ゝ引取ること
なれども、きて、ものをバ、ちぶきてかゝるゆゑ、紫式部乃、物ゝくん
をゝもゝもゝ、そもゝ、源氏君をバ、よれるすゝきわを、ゝるとあつ
めてゝきゝわれぬぶの侍るふかしてゝ、法書ゝ、摂政の北女ゝ、親王
乃北女ゝ、姫君ゝ、北方ゝ、后ゝ、方ゝをはるふ、ものゝ給
ひ、みゝぐゝ后ゝ、方ゝをはるふ、ものゝ給
ひ、主乃方ゝ上天皇ゝ、ゝ号ゝ、ゝえゝひ、ゝ求ゝまで、めでゝ、第ゝ給

ふゝ、ゝ上ゝ、ゝ、ゝ、

なき世に、もし源氏ゐなちらんをあるかぎりさをかゝせむ。しもが
くへのかゝりこふくえかくべき。源氏ゐ物ゝぬ人のゐ乃うゑ物ゝこゝ
ゝ。ゆきかうをハ。ゆくゝがとゝるべし。ことゝもゝ源氏ゐのかゝを絵(ゑ
こゝ世。ゝゝぶゝ。ゆゑの一つ物ゝ。　ゆゑきゆゑゝと此ゝの海。うゝゝ
ぬゝゝ。又ゝゝゝゆきゝゝ。うゝハ古へ人乃絵を世ゝゝぶる例。又ゝを
ゝゝゝゝ世乃。逆絵といふ物を。例ふ引もしるなゝ。うゝゝぬゝゝし。
うゝハ佛のゝゝゝ。天竺の法門をゝゝぶゝ引出もしる物ゝ。あゝ
ふゝゝもゆきゝゝぶゝゝゝゝ。ゝゝふゝゝゆきゝゝし。まゝ仁義徒
者伝を引ふゝて。人の為ゝゝゝといひ。人ゝ佛ゝゝ世ゝゝんゝめ
ゝゝゆゝゝうる。ゝゝて物語ゝいふものゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はらり出ざりるかりふる　十はち　はらりてぞ　かりふるとうでハ　はうう
のんぞ　又　出ざりるる人　まて　なぐ　きしが　ふるる
ものかうぞ　まぞえ　日　はすてうとがそ　そ　そ　大うと人の身
ふおのづうとはうとづきあそ　なき　祖　ふるふかくいるハ　ほりてくそ
きうり　此　祖　はきる　ちやしたつうすんきるこいかくびみる　出
うちるる　身はるふ　はるのあやしきいうるてふう
初梅　巻
なぐはきはうとも　ちうはんと　みのひう　指きふ　ちうはんと　ちの
ほはんるべし　あうはんハ　末をうきる　孫びひるとバ　上ふとが
よふやといつ　ふをうきあ　めびて　かるうぞ　といる　まうふる

しし　法のいの　そとといふて　ちりなんあても　妨あし
おやがほ　はへど　六のひう　どハだを　保るはるべし
いそゆるは　さうはは　大はるなどふ　九のひう　大うかはやむど　はきくく
の　宮はうう　神考　ふふ　ふかくさかりはるう　はうひいづとも
大うう　大はるし　源氏ふ　久事ふ　業ふ　はど　みる　紙ほ　はるふ
ふ　大將　業　大はる　狭衣　大はるなどよぶも　ふ　さかりはるどの　宮
を　ほて　はるし　さるふふ　いるはさかりのるはいるし
さかりきふ　ほて　十のひう　指きのおうし　河海　やまるし
時うう　ほて　十一のひう　時　時　時ふ　はふふ　時をうし　はふ　時　ぞくはどの　時し
ううみう　後ふう　きかど　日　指て　後ふかるうをもおううきだ　お

くくもやあるまじきことし。但いづくにもあれ。
人のたまさかなるこころはさてもさう　十六のもの　なるこころいふてやぞ。
かもど衍ぬて。なるこハ好るべし。

竹川光

こゝハぶんじゃうけさう　二のくるひけさうじめ物語。いづもくまなくなるむ
こゝいふまで。注ぞもあるべくく侘しことふらりて。今ハ行くとめて。く
さくさくさんさん。こゝハとハ此光かゝるしるすぞもをさ
ていつり。源氏のたぞふもうくとハ自ら光をうをていつり。かの光物
ぞ光ふ。ふりかゝ色ひふし後ゝくゝ。出出して。自ら詠て為又
為ふ形ど。源氏ふのたゝは源るもちめるぞ光をうをて。その源

氏乃たまゝハかりハ。後の大殿といふし。後の大殿を。婚再ふ為ふ。るる
ごゝちとハはさが好き女房たをいふ。おち易りゝハ。生（イキ）のゝ好るゝ
為ふきゝるハとハ為ふきゝる相侍をといふんがめし。紫ゆるゝとハ。
紫上のたゝ方にあり。女房たをいつり。紫くいふりゝゆるゝとハいるし。さ
て今いふ。後の大殿ゝゝりゝ好るごゝちの相侍を。紫上のたゝ方の女房
の侍るゝハ。ゝゝざるべゝ。同じやうふ。その方ゝゝりゝ好る。侍をお
きくいつし。かくいふをからの源氏ふ乃たまくゝ好るハ。紫上のたゝ方
ふゝ女房たの侍をおきくふりていつし。かの女ども。ハ。の
るごゝちし。源氏のたまくふゝ。ことゝゝ好女どものいる侍し。ふが
ごゝもくハ。紫上のたゝ方ゝ好女房ゝ好。源氏ふゝ好たまくゝ好るたをゝ

とおきゝるあるべきにつゝぬまるふかうやまりて。寒がるぬるたのまゞ沈る
こゝろつとる何もまてこゝろとハ紫上の居ける女房ハ。彩ようもの
年老て。ほゝゑゞ。きゝが。侍るとほるゆやゝかのるゞこゝちがいひて。
あやゝがりゝるゝし。まれる。るゞこゝちがいふ彩し。いづこゝハまゝゝ
らむゝハ上の侍をうゝをて。此侍の作りやゝがいふし。そハ後の大殿と
ゝゝの女房ハ紫上の居ける女房の。原氏のに来ゝ人ゝのるゞ。
うゝのあきゝるハ。えがてゞも多きゞ。彩ゝが中ゞ。世ゝ殿るゝの
るゝハ。みるゝゝゝして。侍るる。二方ゝとふ。年老る人ゝの。侍
るゝゝ彩とバいづ方ゝまゝゝ彩ゝん。ゝとふゝゞゞ彩ゝぬるる彩
ゝゞゞ。まゞ。みるゝゝふいづるをゝてゞ。ゝゝおくゞゝいふる

そ。その紫上の侍ける女房ハ侍ゝるハ。白ゝ。後の大殿ゝゝ
の女房ハ。うゝ彩ゝるハ。即チ世ゝ。し。ゝて此侍ゝゝゝべゝみゝ作り彩
ゞゝ彩ゝを。寒ゝ彩ゝ。ゝふゝ。ゝゝ彩ゝゝ。人の侍ゝるを中ゝて。ゝ侍ゝおゝゝ。
ゝゝゝゝふゝゞえきてゝゝゝいてゝと。一の島し。ほゞゝ皆侍ゝる中
ふ。えがてゞゝゝとゝいゝを。ゝゝふ。侍ゝ。の。ゝ。ゝ。ゝゝゝの。ゝ。
又ゝ。ゝゝのゝ彩ゝふゝて。ゝ。ゝハ。ゝふいゝゝゝゝゝゝ。ゝ彩ゝのゝゝゝ
ゝゞゝのゝ彩ゝゝゝゝゝゝ

色でくれば　十二のうち　くつがえるは　そで色をつゝ何りて
きえうつるを　花うつるなどいふつゝ　再三色でるしといふは　徳し
さるものなるは　さん　日　なるは　さん　すぐる　好　ゝんもいぐ　もゝは
なるさんを　徳　色　ゝ　ゝ　ゝ

の湯し、たけきまゝ、ハ、一そのほうそのえび、ゑびきこハよべき、春を始りさ
じらそ、いそびてうつ、ほひ、和を、ほきんの唐きもの、きやとのつゝ
あをいろうることとろ、ひわき作らん、いとんなるよゝし、ほいつゝ
きもびし、

花をは食をも書ほしうゝ　十七のひゝ　二つのをゝ、ほは、ほるあをうれと
いつゝふうはもど、色も書るとてそをべる。
作ゝ法ゝ作　日　をゝ、行するべし。
かゞすふうひてぞ　十九のひゝ　和の作ふうひて、あびつし。
うさゝゝゆゝうゝ　日　ひびゑうきハ、ひやとはうきまし、うゝ出てう。
汁椀の蛤ゝはふ、うて、時之のゝそふ、ひやとはうきとし。

うふありてうゝ　日　ゝきはふゝいふふ、右方ふうはうこをせもせうう。
ゝゝ、ゝ作を、ゝをゝいふゝ、ゝし。
うはうゝ出ゝ　十の日　結句、一年、神をあをやとはうゝ、ゝをはうゝ、右方ふ
も、方ふあふあびうは、神もびはとハ、稲びしゝとゝ、うる神ハ、苦もな
うゝしものをゝいふし。
和ぐさをゝさせ結へ　日　おれの、ひを、なぐさめ結へうう、お着ゝのこうゝへ
ふけわどをおゞゝ、ゝづをて、和ぐさあゝんまをもとはうる出て、ゝるべし。
住いゝゝき、ゝがゝゝし。
ういでやなぞゝう　十三のひゝ　和ゝる出て、白洲切て、ゝるべし、かゝゝまで、ひやゝ
いゝやはゝうぞゝ、みづゝうどうゝるし、さて、和ゝうゝぬゝ、まみじも、苦

の源の行しと云ふと云ふ会せて考べし。

あらふそ考ふ　十四のひら　此方ハ中ねのおもて移るべし。五音云はゝ

してハとふとふのそもろわ移をうれといふとかつうかるびわ

五音云の移るばうわれし移ふうるとてそいふべうと。

考べきと云ひ人ひ伝るふ　十五のひら　べきハべし移るべし。後の音人ハかう

やうは河のさゞかわ流ちるかふ毎く字し湯ちるなるん。

あつのられるふ　十六のひら　伝ひ移ら毎音成おハとといふ一云も。その人う

ちてかくべきこと移るを。あハいう移る人よかるあとも。ひたまちるぞ

下句はんちるひいゝおもゝろし。

ゆゝきかるふしなりゝ　十八　あハとといふ一云もいう移る人よかるあとうハち

ゝ絲どもゝ今うだわてきゝゝゆゝしき方ちて。んまハかのふたうとと

ちひちうゝかわそもも高の方ちうだゝゝゆゝきき方ちてぞし

ちるゝいふゝうて移んといる河ふんをつくべし。又かのふと

いるもんちるひき　住ぞしハおろそふて。こあう移るをたゝうハとぞ

文語きの。高の流も。下句の河うかあつぞ。

あいきる音ちうゝ　十七のひら　ゆゝしれうをあれんうゝいうをうきて。

絲ゝバ。乾きハそて死あバわうとのうあふこのたうもやきん。絲とぞ

と死ちるこハんふまう世絲バいうなうん決ちそハちわがうれぞその

云ぞうつとてのうゝちふ一云をもつひよきでやゝんとゝ。

ちぞゝちあひのひうんと　十八のひら　まひちんハあそちんるべし。

ゆふかたうく　日　松山のうとハなれ。ほの白ゆこゆるハ。くぢらとそふる
とふいつるのとをり。
うもれくさき　日　結句。菊の花の孫うえ。がらざわりをとはじ
ゆ。まとわり。とハまうせざわりをとはじ
かんの君を中納ふ　十九のひら　かんの君をいとものしとおぼして。そのよう
を中納ふし。かんのゑふといふとハ異し。
菊人おるの月乃光　廿三のひら　かゞやきハ月の光をまばゆくおも
ふて。たぐかゞやくといふ。容貌のをでくして。ほかゞやく
といふうハかるび。蹈ゆ。此院中ゆて。菊人おるの月の光をま
ぶゆくおもひ。月ゆ極のぎ。をづくおもひておハ

わくで。彰女院ゆ見給ふとおもふ。ゆてまゞ西かうしゆやわく
ん。ゆ給ゆて。禁中ゆてハ。ゆもまゞ西ゆふもてゞおもひといふ
をり。院中ゆ対ゆて。ゆ上とハ禁中ゆいふて。紅葉ゆ冷泉
院ゆ対ゆふ。ほゞといふき。さて此院。菊人ゆ
おるのうへをいつふおくよをて。下ゆんゆハ。ゆ。みづうゆんをもこめ
ゆ。ゆゞ。ゆ。一重の月。ゆ。ゆ。ゆ

ぬひきて、まを、はくしも、院へ、まゐり給ひて、むるしくはもてるよし、
さし、けすふらりて、左方云ハうにはものぞ、ふひもてるとし、ほどもいう
なることりう、弦、ゆしぐう、
他のええも、ものきやうはとど　ポエのひ　事あり、給ふ後、なる、ほし、下の男
えの、ゆ、給、なる、ふ、ふ、ふ、あり、給、ぬ、ゆ、給、ま、ば、ふ、ふ、ふ、ふる、ふ
合きて、知べし、　姫、ふ、ほし、と、いふ、ふ、俗（サドゴロ）ふと、
ひづ、ふ、ふ、て、ふ、ゆ、や、ま、ざ、ふ、ふ、て、ふ、　ポエのひ　姫、ふ、ひ、ぐ、ぐ、文、中、ゆ、ふ、と、
中、ふ、な、ど、ぐ、ふ、ふ、ぬ、ま、ふ、て、ふ、ふ、ぐ、ふ、ま、ふ、ふ、ぐ、ふ、ふ、や、ま
ぐ、ゆ、ふ、ぐ、ふ、ま、ふ、ぐ、ふ、し、上、ふ、ふ、ふ、ふ、と、ま、ぐ、ま、ふ、ま、ふ、ま、ふ、ふ、
と、いふ、ゆ、ぐ、ぐ、ふ、し、ふ、て、と、いふ、ゆ、ぐ、ぐ、ふ、し、

こ、ゆ、ぐ、ゆ、ゆ、ん、を、ゆ、ぐ、し、て　日　ふ、た、の、ふ、ゆ、ゆ、を、ゆ、ま、ぐ、ぐ、姫、ふ、を、みやづ、ぐ、
ゆ、ま、し、ま、ま、ん、ま、ゆ、ゆ、奏、し、ゆ、き、給、ひ、ま、ゆ、ゆ、ん、を、ゆ、ぐ、て、し、給、ま、
ん、ん、と、いふ、ま、ゆ、ゆ、ぐ、ぐ、
むりの例　日　伊海の以尚侍（ナイシノカミ）議（ギ）子（シ）に例（レイ）可（カ）勘（カンガヘ）とぞ、
ま、ま、ぐ、給、ま、ま、ま

う宴ハ彼所のまつりごとかなて。ねるべくゝざるすし。をやく。壌ヨテ。
中ゐるゝ。をづくきゝ。ゑ。ねゝ。ゝし。傍のさ毎ゆゝ味ひて。ゐるべし。
みとゝちの大根（ダイコン）は浮むを。ゐ。ゆゝ　早ゆゝ　みとゝちの仁女を。蓋ゐ。ゐ。ゝと
んぐゝ。ゐ。ゝ。ゐ。ハ。ゐ。ゐ。ゐ